

## 発見される里山：針江

韓 準 祐

### I. はじめに<sup>1)</sup>

覚えていますか。あの日の時めき、日本には、かつて、至るところに豊かな水辺の暮らしがありました。斜面に広がる田んぼや小川、雑木林、昔ながらの身近な自然は、里山や里地と呼ばれています。人里を潤す水辺も、そうした環境の一つです。そこには、沢山の生き物が人の傍らで命を繋いでいます。人びとは、様々な水の恵みを受けて暮らしてきました。私たちの暮らしが、少しずつ自然から遠ざかっていくいま、身近な生き物たちの世界が改めて注目されています。里山には、人が自然とともに生きるための知恵が隠されています。人と自然が織り成す、命きらめく水の里の1年を見つめます。

上記の文は、NHK スペシャル映像詩『里山Ⅱ一命めぐる水辺』の冒頭で語られるものである。同ドキュメンタリーは、人と自然が共存する「里山」に焦点を合わせ、その模様を丹念に記録した「映像詩里山」シリーズの一つである。『里山一覚えていますか ふるさとの風景』（1999年2月7日放映）、『里山Ⅱ一命めぐる水辺』（2004年4月3日放映）、『里山一森と人響きあう命』（2008年9月21日放映）と続く同シリーズは、滋賀県大津市出身の写真家、今森光彦氏の協力のもとで制作され、「里山」への関心を高める媒体として機能した。

特に、針江地区の川端、中島での漁、ヨシ原など、人と自然、動植物が共存しながら営みを続けていく様子を描いた『里山Ⅱ一命めぐる水辺』は、日本国内にとどまらず、韓国、台湾などアジアの国々を含む国外にも放映され、国内外から高い評価を受けるとともに大きな反響を呼んだ<sup>2)</sup>。同ドキュメンタリーの放映後、針江地区に見学者が訪れるようになったことで、針江地区の有志が「針江生水の郷委員会」を組織し、針江地区における水利用や環境とのかかわり方を説明する活動を始めた。

外部から針江地区を訪れる人々の主な関心は、針江地区の水利用システムである川端（カバタ）に集まっている。針江地区に残されている生活文化の象徴ともいえる川端は、湧水<sup>3)</sup>を飲料・炊事等の生活水として使用する水利用システムで、元池（湧水が出处）・ツボ池（元池からの湧水を一旦ためて、飲料・洗顔等に使う処）・端池（ツボ池から溢れ出す水が水路及び川と繋がる場所）によって構成されている。この地域を張り巡らされている水路に各家内外にある川端がつながっている点が針江地区の最大の特徴であり、川端から水路に出る水は汚さないという暗黙のルールが受け継がれてきた。同地区には、簡易水道が普及された今でも湧水を飲料・炊事などのため使い続けている住民が多く、川端も約110箇所残っている。

筆者の関心は、上水道の敷設とともに、否定的視点から語られることの多かった川端が、如何なる過程を経て、「里山」の表象の中核的な要素として捉えなおされたかという点である。これまで近代化に伴う川の水利用やその生活文化の変化や水のイメージに関する研究は見られるが<sup>4)</sup>、川端と

いう伝統的水利用システムを含む針江地区の生活文化が如何なる過程を経て、「里山針江」のシンボルとして発見されたかに関する考察は行われていない。

『里山Ⅱ—命めぐる水辺』というドキュメンタリーの放映によって、針江地区における水資源利用及び環境へのかかわり方に国内外から注目が集まったことは確かである。しかし、1970年代後半における琵琶湖周辺地域の調査を基に生活者の環境へのかかわり方を評価する生活環境主義が提唱されたこと、またその研究グループの一員で、1980年代後半から地域住民による環境に関する研究を促してきた「水と文化研究会」の代表を務め、2006年に滋賀県知事となった嘉田由紀子氏や針江地区出身で新旭町議会委員、新旭町長、高島市長を歴任した海東英和氏による川端に対する評価も考察する必要がある。さらにエコツーリズム大賞、重要文化的景観、日本遺産といった「お墨付き」を与えた政府のかかわりも看過できない。そこで本稿では針江地区を中心とする多様なアクターのかかわりの一端を年代別に整理し、針江地区が「里山」として発見され、表象される過程を探ることにする。

本稿のⅡ章では、まず、用語としての里山の変遷について記述し、次にメディアや研究領域における里山への注目を、使用される頻度の年度別推移から確認する。Ⅲ章では、針江地区の概要と針江地区を事例とした先行研究をまとめる。Ⅳ章では、1980年以前から2000年以降までを4つの時代に区分し、どのような過程を経て、針江地区が地域外部から「里山」とした表象され、住民自らもエコツアーの案内役を担うようになったかを整理する（時代区分は互いに連続し、部分的に重なる）。Ⅴ章では、研究成果と課題について述べる。

## Ⅱ. 里山に集まる関心と捉え方の変化

地域に根付いた文化を保存する時代から、その活用に関心が集まる今日、観光資源の発掘に力を入れる自治体や地方を生活の場とする人々は数多い。そんななか、「里山」は、「ふるさと」と「原風景」といった表象群とともに、人びとの営みと自然が調和された理想的な農山村を意味する、いわば資源化される農山村を象徴する用語として使われている。そもそも「里山」はどのように定義されてきたか。堂下は、「人里近くにあつて人々の生活と結びついた山・山林⇔「奥山」：人里と離れた奥深い山・深山」<sup>5)</sup> という広辞苑の定義に触れた後、深町・佐久間<sup>6)</sup>の定義を引用しながら、「雑木林やため池、田圃、集落などを含んだ環境のセット」がエコツーリズムやグリーンツーリズムで対象となっており、この場合、里山・奥山の区別はせず、人が歴史的に活用し、共生してきた環境、言い換えれば農山村全体を指すと述べる<sup>7)</sup>。

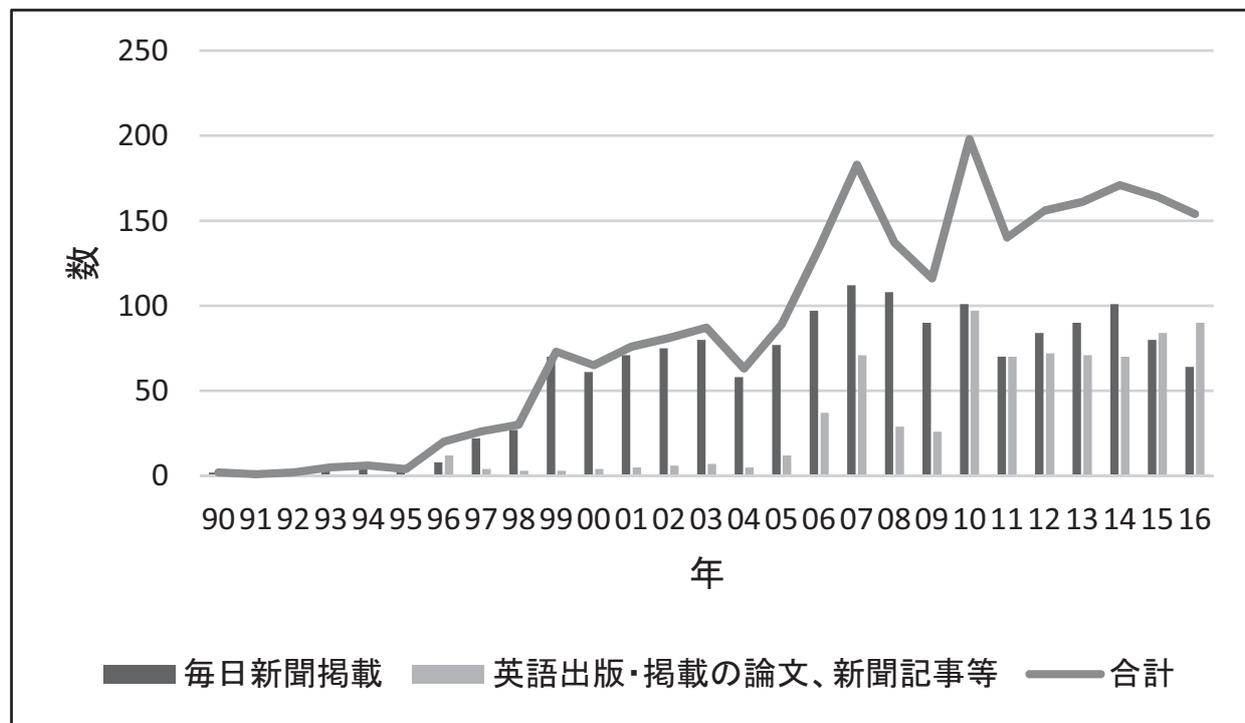
そのよう里山の変遷を堂下は、戦後の朝日新聞記事の内容から読み取ろうとする。彼女によると、1980年代までほとんど「里山」というキーワードが使われていなかったが、1980年代半ばから、森林保全に関するシンポジウムやセミナーの紹介記事のなかで、里山という用語が表われるようになったという<sup>8)</sup>。さらに彼女は、1990年代前半には、ゴルフ場などの開発反対や自然保護を訴える動きのなかで里山が取り上げられ、愛知万博誘致の是非をめぐる論争が活発化される1995年以降、里山に関する記事が急増し、その議論のなかで、反対派によって里山が、単なる雑木林ではない、「貴重な、身近な、人と共生してきた包括的な自然」として捉えなおされたと述べる<sup>9)</sup>。

1990年代以降の里山に関する関心の増加は、他のメディアからも確認できる。例えば、毎日新聞

においても「里山」「さとやま」の言葉が使われる頻度は1990年代後半から急速に高まった<sup>10)</sup>。「SATOYAMA」という英語の表現が、掲載・出版された新聞、学術誌、業界紙、電信記事、学位論文の合計数も、1970年代に1件、1980年代には見られなかったが、1990年代に22件、2000年代に201件、2010年から2016年10月18日まで554件と増加した<sup>11)</sup>。日本語の「里山」「さとやま」と英語表記の「SATOYAMA」という言葉が使われる頻度の増加時期には、若干のズレが見られるものの、毎日新聞の記事の「里山」「さとやま」の掲載件数と研究領域やメディアにおける「SATOYAMA」の出版・掲載件数の合計からは、1995年代以降「里山」への注目が集まったことはいえるだろう。

このように1990年以降「里山」に注目が集まる背景には、持続可能な開発へのパラダイム転換、エコロジー思想の普及、アウトドアブーム等が考えられる。加えて、「里山」「SATOYAMA」の使用頻度の増加が顕著になる2004年と2009年は、「文化的景観」、観光政策の転換期と重なる。菊地<sup>12)</sup>は、棚田の前景化される要因として指摘する世界遺産の影響を受け2004年「文化的景観」というカテゴリが文化財保護法に追加されたこと、WTO体制下、農政が「文化」「環境」政策へとシフトする流れについて言及しているが、里山という表象全体に関連する指摘として捉えられよう。さらに、小泉内閣の下、観光まちづくりが政策化され、2007年には「観光基本法」(1963年制定)を改正した「観光立国推進基本法」が施行され、翌年の2008年には観光庁が発足されたことで、観光による地域振興を図る取り組みが日本全国の地方社会において活発化されるなか、魅力的な農山村を描く上で「里山」が主要な表象となってきたことも確かである。なお、「里山」「SATOYAMA」の用語の使用頻度の急速な増加傾向が見られた1998年、2004年、2009年は、冒頭で記述したNHKの「里山シリーズ」の放映年度(1999年、2004年、2008年)とほぼ同時期であることから、その関連性が伺える。

次章では、「映像詩里山」シリーズの一つである『里山Ⅱ—命めぐる水辺』の撮影地として選定さ



第1図 「里山」「さとやま」「SATOYAMA」の使用頻度の推移

出典：毎日 News パックと ProQuest の検索結果に基づき筆者作成

れ、川端を含む水資源利用、その生活文化が注目されている針江地区の概要と針江地区を事例として取り上げた研究を整理する。

### Ⅲ. 針江地区の概要と先行研究

#### 第1節 針江地区の概要

滋賀県高島市新旭町針江地区は、比良山系の東側、琵琶湖の西側に位置している、総戸数170戸、面積60haからなる規模の大きな農村集落である。この地区は、針江集落と小池集落で構成されているが、明治7(1874)年地券改正の際、針江村と小池村が合併し針江村となったことに由来する<sup>13)</sup>。針江地区には約600名が生活しており、新旭町における道路交通網の発展やJRの利便性の向上に伴う駅周辺土地区画整備事業や、民間の住宅開発が相まって、転入者の増加が見られる<sup>14)</sup>。高島市の2010年9月から2011年2月にかけての住民登録に基づく統計では、全人口対65歳以上の割合、高齢化率は、26.94%から26.98%を維持していた<sup>15)</sup>。新旭町では繊維産業が発達したが、針江地区も例外ではない。

針江地区のある住民によると、昭和30年代から50年代までは撚糸と扇骨業を家内工業とする世帯が3分の2以上だったという。しかし、最近では約7割が民間の会社などへ勤務するサラリーマンの世帯となり、変化が見られる<sup>16)</sup>。

比良山系の地下水と安曇川の伏流水が流れ、湧水が豊富であることも針江地区の特徴である。同地区の中心部を通る針江大川の河口付近の沖合200～300m付近には、針江浜遺跡として知られる、水深1～2mの浅瀬部分があり、弥生時代からの湧水を利用したという調査結果が出ている<sup>17)</sup>。針江の湧水は、2008年に「平成名水百選」に選ばれている。

#### 第2節 先行研究の整理

琵琶湖周辺に生活する人々の環境とのかかわりや生活文化に焦点を当てる研究は蓄積されてきたが、針江地区に焦点を当て取り上げた研究は2004年以降顕著となる<sup>18)</sup>。例えば、建築工学的視点からの針江地区の川端の利用実態や集落との関係の分析<sup>19)</sup>、モノケの分析<sup>20)</sup>、また、水辺景観における景観構成要素の成り立ちの分析<sup>21)</sup>が行われてきた。一方、田中ほかによる琵琶湖沿岸ヨシ群落の植物種構成による再生評価手法の考察<sup>22)</sup>、牧野によるヨシ帯保全に焦点を当てた自然と人間の関係を探る考察<sup>23)</sup>も進められてきた。観光という側面に関しては、西尾・藤田によって、針江地区に加え、滋賀県米原市、岐阜県郡上市八幡町における水路を利用した集落の観光化の分析<sup>24)</sup>が行われ、翌年には、杳掛・敷田によるエコツーリズムの対象地域として、長野県信濃町と針江地区の発展プロセスの比較分析<sup>25)</sup>も行われてきた。さらに近年には、野田による観光まちづくり研究とコミュニティビジネスの枠組みからの考察も行われた<sup>26)</sup>。

## IV. 「里山」として発見されるまで

## 第1節 「利用しながら手入れするシステム」：1980年以前

水や自然環境を生活の一部として身近に感じることはほとんどできない今日において、針江が注目されるのは、その距離感の近さにあるといえる。以下では、「高島市針江・霜降の水辺景観」保存活用事業報告書の内容を引きながら、かつて針江地区で見られた「利用しながら手入れする」仕組みについて整理する（第2図を参照）<sup>27)</sup>。

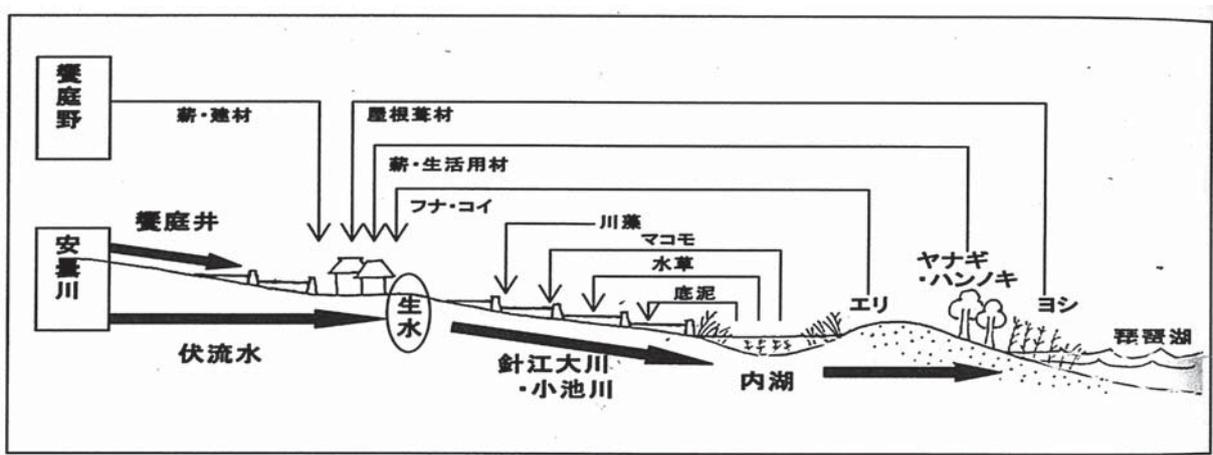
まず、針江大川と琵琶湖を繋ぐ内湖の中島の浚渫作業を通してすくい上げられた底泥は、盛土して田地の拡張に使用された。また、中島の水底に生えてくる水草も肥料として、苗の間に踏み込まれ、例えば、西浦の内湖のマコモは村の共有財産で、毎年6月10日11時解禁、一戸につき一人ずつ田舟で刈り取りに、菜種・麦などの裏作の後の水田に入れていた。

鯉・鮒の漁に関しては、春から初夏に産卵場所である入口の水路に、「川エリ」を設置したが、村の共有財産で、入札によって行使者が決定されていた。浜のよしの権利も村がもっており、25の区画に割って毎年入札を実施し、落札金によって村の経費の半額はまかなえたという。やなぎ・はんのき林については、昭和20年代までは、割木・薪として、堅いはんのきは下駄の歯やまな板の原料として売買されていた。

針江大川や針江地区を張り巡らせている水路の管理のため、現在それぞれ一年に4回と2回の掃除が行われているが、昭和28(1953)年までは、針江大川の「川掃除」は行われていなかった。昭和20年代までは「川藻」に肥料としての価値があり、畑に入れられ、夏の野菜類に用いられたため、普段から早い者勝ちで採取されていたことから、改めて「川掃除」する必要がなかったという<sup>28)</sup>。

## 第2節 上下水道の普及と生活環境主義の提唱：1980年代

針江地区では、昭和54(1979)年から昭和56(1981)年にかけて上水道敷設工事が行われ、昭和57(1982)年2月から上水が供給された。新旭町における上水道敷設工事の時期は3段階に分けられたが、湧水の豊富な琵琶湖周辺の地区である針江地区と太田地区の工事は最後の時期に行われた<sup>29)</sup>。



第2図 針江地区の水利用・文化的景観

出典：高島市新旭地域のヨシ群落および針江大川流域の文化的景観保存活用委員会編『「高島市針江・霜降の水辺景観」保存活用事業報告書』、2010、146頁より転載

ただ、当時の水道局の担当者によると、上水道敷設工事の説明会で、針江地区の住民から工事に対する反対の声が上がったという。湧水が豊富であるが、鉄気がする川の下の大田地区の住民は上水道の敷設工事が行われることを喜んでいて、針江地区の住民は、そうではなかったと当時水道局の担当者は記憶していた。

針江地区の自治区会長や老人会の会長の経験を有する H 氏は、最初上水の推進のため、針江区役所の前に位置する明星会館に水洗トイレを設置し、それを見て上水の普及を促したと語る。さらに、「当時水道を工事するとただでやってくれたけど、個人的にやろうとすると（当時の金額で）7-8万円はかかるというので、とりあえずほとんどの人々が水道を引くことにした」と述べる。実際、現在の針江地区で上水を引いていない家庭は3軒しかない。その内の一軒が、映像詩『里山Ⅱ一命めぐる水辺』で主に描かれた田中三五郎氏の自宅である。しかし、大多数の住民は上水を最初だけ使ってみたが、カルキの味がしたため、すぐに栓を閉めたという。その理由を H 氏は「昨日とはまったく別のものを使うということにはものすごく抵抗があった」からだと言っている。

一方で、上水が供給される時（あるいは上水道敷設工事が進められた時）に引っ越した地元住民の T 氏は、奥さんに川端を造ってほしいと言われたが、新たな家には川端を造らなかったと語る。湧水を引いて使うこともなく、水道のみを利用し、その後も湧水（地下水）を使っていないという。昭和 57（1982）年に上水道の供給が開始され、同年 4 月から使用料徴収始まったが、その一年後の昭和 58（1983）年頃の湧水に対する針江の人たちの反応は、「若いもんが『不潔やし、家が湿気る』と、言ってな」と、人に見せることに対してはかなり控えめで、「川端」を後ろ向きに捉えるところがあった<sup>30)</sup>。

このような伝統的水利用に関する否定的な捉え方は、針江のみならず、近隣するマキノ町知内でも見られる。知内では、針江に比べ 25 年も早い昭和 32（1957）年に簡易水道が整備された<sup>31)</sup>。前川の水を飲んでいて知内の人々は、簡易水道の普及で、前川の水を飲まなくなった。簡易水道が入ってから 25 年後の昭和 57（1982）年、嘉田前滋賀県知事<sup>32)</sup>が調査した際、子供たちには、かつて親が前川の水を直接飲んでいて知らされていなかったという。嘉田は、水道もないような貧しく恥ずかしい時代だったという意識が人々にあったと述べ、「湧水のワクワクするような川端でさえも遅れた恥ずかしいものだと考えていた」と述べる<sup>33)</sup>。

桜井は、知内の前川の水利用の変化の背景に、農業と生活様式の変化、つまり、農薬、化学肥料や耕運機の普及、田圃整備などの変化、そして簡易水道の敷設によって生活排水を前川に流すようになったことがあると述べている<sup>34)</sup>。昭和 30 年代に上水が完備された知内において、前川の水は汚染し、かつてのように飲めるような水ではなくなったのである。そのような水が流れたであろう昭和 50 年代後半に親から子供たちに前川の水を飲んだということを伝えることはできなかったと推測される。また親が前川の水を飲料として利用したことを伝えたとしても、子供たちに信じてもらえる可能性は高くなかったであろう。

針江地区では、T 氏のように、川端を新たに造らず、湧水を家の中に引こうともせず、上水だけにするケースもあったが、多くの住民は抵抗があったため、あまり上水を使おうとはしなかったという。実際、高島市の水道局の担当者も、ようやく最近になって、針江地区の上水使用量が、他の地区の平均値に近づいてきたと言った。針江地区の多くの家庭では、水圧が必要とされる風呂やトイレ用には上水を使い、その他の飲み水を含む生活用水は、湧水（地下水）を家庭内にポンプで上げて使用している。それでは、直接使用されなくなった川端が残されているのはなぜだろうか。その

理由の一つは、針江地区における水利用に関する信頼関係にある。針江地区で酒屋を営んでいる M 氏は、「もし、上流で汚い水が流れ込んでいたら、川端は潰していたかもしれない」と語る。川端は、一軒一軒、他の家庭の川端に水路で繋がっているため、「喧嘩しても、いがみあっても水は信頼する」関係性が続いてきている。また、川端を主に利用するのは女性であり、地元の人々にとっては守っていかないといけない聖なる場所として認識、また意識されていることも理由として挙げられる。従って、男性の判断のみで簡単に川端を潰すことはできず、ある地域住民によると、川端を潰すかどうかという判断は、家族会議で検討する必要があるという。つまり、針江地区では、各家に繋がっている川端の水、とりわけ下の家に流す水を汚さない暗黙のルールが存在すること、また川端そのものが聖なる場所としても位置付けられてきたことが、川端の存続に影響を及ぼしたと言える。

上水道の敷設が進み、湧水（地下水）を利用しなくなった住民が現れる一方で、1980年代には、針江地区を含む琵琶湖周辺地域で見られる人々の自然とのかかわり方が、「生活環境主義」という用語で評価されるようになる。1970年代の終わりの頃から、鳥越皓之、松井厚、嘉田由紀子、古川彰、松田素二らは、総合開発関連の琵琶湖周辺地域の調査（例えば、滋賀県琵琶湖研究所の委託調査等）結果から、琵琶湖周辺地域を対象に人びとの自然とのかかわり方を評価する「生活環境主義」を提唱する。彼らの研究グループのメンバーは、現場で、既存の政策として利用されている科学的モデルと地元の関係者や住民たちの考え方の食い違いの大きさに驚き、エコロジー論に立脚し、自然環境の保護をもっとも重要視する考えを「自然環境主義」、近代技術に信頼をおく考え方を「近代技術主義」と呼ぶことにし、地元の人たちの生活のシステムの保全をもっとも大切と見なす考え方を「生活環境主義」と名付けた<sup>35)</sup>。昭和 59（1984）年に発行された『水と人の環境史—琵琶湖報告書』のはしがきには、「県に提出した各年度の報告書はすでに存在するが、私たちは県への報告書にあきたりず、じぶんたちの論理をもう一步ふかめたかたちで、このような本を作成した」と記述されている<sup>36)</sup>。

しかし、当時の行政は「生活環境主義」のシンボルともいえる川端を景観の一つとしては十分に認識していなかった。昭和 63（1988）年 3 月に発行された『風車と花菖蒲のまち新旭—新旭町景観形成基本方針』では、山麓、さと、田園、河川、渚のゾーンにわけて景観を捉えているが、川端に関する具体的な記述は見られず、さとゾーン（道路・水路）で北畑の水路の横に水を使う場の写真が唯一掲載されているだけである<sup>37)</sup>。

### 第 3 節 地域住民と研究者による共同研究へ：1990 年代<sup>38)</sup>

本節では、地域外部の研究者と地域住民がかかわりながら、琵琶湖周辺地域の共同研究が如何に進められてきたかを概観する。とりわけ、その共同研究と琵琶湖周辺地域の環境への関心を高める役割を果たしてきた「水と文化研究会」の活動と、共同研究後の地域住民と地方行政の湧水と川端の捉え方について整理する。

#### 1) 「水と文化研究会」の設立と活動

「水と文化研究会」は専門家や行政から与えられる情報だけに頼ることなく、自分たちの目、耳、手とそして頭で身のまわりの環境情報をつくりだそうという、いわば「知識をつくりだす」NGO である。生活環境主義の提唱者でもある嘉田氏が代表を務める同組織は、「ホタルダス」「水環境カルテ」を大きな柱として活動してきている<sup>39)</sup>。

まず、ホタルダスは<sup>40)</sup>、滋賀県で平成元（1989）年から始まった住民参加によるホタル調査であるが、ホタルだけではなく、ホタルを通じ、身近な河川や水域の環境に目を向けてみようという趣旨から始まった。これまで、3000人近くの人々が身の周りの水辺をしらべ、パソコン通信、ファックス、手紙、電話などで情報を交換してきた。

次に「水環境カルテ」は、水道普及の前後の滋賀県の各地域の水利用を調べ、水道が入る前の生活用水や生活排水のしかたを暮らしのなかから見つめなおすものである。約80人の地域住民が1000人以上の高齢者を対象に聞き取り調査を行い、その結果は場所ごとに、調査者の名前、説明してくれた人の名前、水利用の写真、地図、説明の内容などをパソコン画面上に表示されており、地図を見ながら滋賀県各地の水利用の実態を確認することができる。

滋賀県琵琶湖研究所のプロジェクト研究の一環として、平成3（1991）年12月からの風の観測でスタートし、その後、滋賀県立琵琶湖博物館の展示製作のための調査、滋賀県立琵琶湖博物館の共同研究の一つとして受け継がれてきた「ビワコダス」も「水と文化研究会」がかかわった活動の一つである。

なお、本来は琵琶湖地域環境教育研究会が中心となって活動を続けてきたが、平成12（2000）年から新旭町と「水と文化研究会」が協力して「水の学校」という事業を行っている。「わたしたちのそばに当たり前のようにある“水”という自然の恵み。子どもたちにその尊さを、郷土の社会の中で実際に体験しながら学んでほしい。そして自発的に環境保全に取り組んでほしい。そんな願いを込め」たこの事業は、新旭町の小学校高学年から中学生の子どもたちが、町の各地域を巡り、水の歴史や水の暮らし、人と自然のつながりなどを学んでいる<sup>41)</sup>。

## 2) 水利用、川端について

地域住民と研究者による共同研究の成果を、嘉田は次のように記述している。

私たちが水環境カルテをつくることによって、人びとが伝統的な水利用の素晴らしさを発見し、「これってすごいですね。湧水って素晴らしいですね」といいつづけて、少しずつ種がまかれ、広がっていきました。カバタなど自然な水利用へのとらえ方、見方も、貧しく恥ずかしいものという考えから、環境に適した素晴らしい工夫だと、認識が次第に変化してきたのです。<sup>42)</sup>

ところが、その変化は、すぐに現れたとは言い難い。NHK映像詩『里山Ⅱ—命めぐる水辺』のプロデューサーの今森光彦氏は次のように述べている。

ただ、僕が三五郎さんと知り合ったときには、集落のほとんどの人が（おそらく8割以上だったと思います）、川端を使っていませんでした。水道が完備されて、川端にふたをしていました。三五郎さんと何人かの年輩の方だけが、昔からの生活が忘れられないとあって、水道を引かずにそのまま湧水を使っているという状況でした。それにもまた驚きました。若い世代には、地下から湧いている水は、安全性も含めて信頼されない水になってしまったんだ、ということがわかりました。三五郎さんの息子さんは、飲み水は水道水で、風呂に川端の水を使うそうです。三五郎さんは自分なら逆に、飲み水に川端の水を使い、風呂には水道水を使うだろうといひます。<sup>43)</sup>

さらに彼は、『里山Ⅱ—命めぐる水辺』の撮影のモデルの候補として、田中三五郎氏のところの川端以外に5つほどがあったが、すべての川端に蓋がされていたため、川端を使った様子を聞いて再現してくれるようお願いしたと述べる。さらに彼は、皆の記憶が新しく蓋を閉めてから10年経っていなかったおかげで川端は救われ、同ドキュメンタリーが放映され、外部の人々が訪れるようになってから、針江の人々が川端の大事さに気づき、川端への理解がより深まるようになったと述べる<sup>44)</sup>。

ここで、確認しておくべきことが一つある。川端を使わないことが、湧水も使わないということではないという点である。今森氏の上記の記述は、川端の利用のみならず、湧水も使わなくなっていたという誤解を招く可能性があるが、本章の2節で述べたように湧水を川端で利用するというより、ポンプで家の中まで引いて、飲料・生活用水として使っているのである。いずれにせよ、川端を使うことが、近代的上水道システムの普及とともに若い人々には、後ろめたく思われるようになったことも確かである。それでも針江地区に川端は多数残されており、また川端を直接使わないとしても、湧水（地下水）を利用する人々が多数いることに変わりはない。

次に、行政側が川端を如何に捉えていたかを確認することにする。平成10（1998）年2月に、新旭町の要望で、国土庁のMONOまちづくりアドバイザーとして、藤原肇氏とともに伊達美徳氏がこの町を訪れた。彼らは新旭町のMONOまちづくりの方向として、生業の場としての工場と生活の場としての住宅が混在しながらも調和する集落を育成しようとすることを提案した。アドバイザー藤原肇氏からは、特産品「ちぢみ」がクレープとよばれることから、お菓子のクレープをも名産として導入してはどうかという提案があった。さらに、新旭町MONOまちづくりコンセプトを「クレープ・ビレッジ新旭」として、この「クレープ」にはファッションとグルメを、「ビレッジ」には集落風景と産業コミュニティを、それぞれ込めているものとして提案された<sup>45)</sup>。

当時、焼き板で作られる建物と集落の風景は評価されたが、風景のなかで川端を含む水利用システムは注目されることはなかった。平成13（2001）年3月に発行された『第4次新旭町総合計画』<sup>46)</sup>の中で、町の誇りとして、「川端文化」「かわと文化」の言及があるものの、その活用にはまだ結びついておらず、第4章の「活力のある質の高い産業のまちづくり」には、川端をはじめとする生活文化に関する記述は確認できない。同章の「魅力ある観光の振興」の現状と課題としては、「体験学習や特産品の開発販売など施設の充実や観光客の増加とともに、環境対策の推進も望まれ、（中略）一方、歴史的、文化的資源では保福寺、大善寺、大荒比古神社等の文化財をはじめ伝統的祭りや遺跡等があるが、今後の観光資源としての活用が課題である」と指摘されている<sup>47)</sup>。なお基本方針では、「新旭風車村を拠点に、農業や繊維産業など本町全体の魅力を最大限に引き出す観光ルートをつくつか設定し、それぞれのルートの特徴を生かして、ふれあい、手づくり、体験、学習の五つの要素を意識した、体験・滞在型に対応する観光の振興を図る」と記述されている<sup>48)</sup>。

それでも平成12（2000）年の針江大川の護岸工事で、堤防の2面をコンクリートにしながらも、川底は石にし、子供たちが遊べるようにしたこと、また堤防底の横には魚が休める隙間をつくったことは、彼らの生活が自然、とりわけ水と密接な関係にあることを表すものとして理解できよう。

#### 第4節 「里山針江」の誕生：2000年以降

本節では、針江地区出身で新旭町議会委員、新旭町長、高島市長を歴任した海東氏や、「生活環境主義」を提唱した研究グループのメンバーで後に滋賀県知事となった嘉田氏が「里山針江」の誕生に及ぼした影響を整理し、その後メディアや地域住民、日本政府による里山針江の表象をまとめる。

まず、海東氏による川端の評価と彼の町長・市長としての川端に対する取り組みの方向性について整理する。平成 13 (2001) 年に新旭町の『二一世紀記念誌』に載った『里山Ⅱ一命めぐる水辺』のプロデューサーである今森氏が撮った「つぼ池の写真」が針江地区の「川端」を見直す契機となったと、当時の新旭町長の海東氏は次のように語っている。

簡易水道が整備され、衛生的な生活の侵略は川端存続の危機だった。しかし、壊してしまう家は少なかった。新旭町の「二一世紀記念誌」(二〇〇一年新旭町役場発行)で今森光彦さんの撮ってくださった「つぼ池の写真」に共感した。「そや、そうなんや」、そのとき小さな歴史が動いた。もし、あの写真がなかったら……他所の「カワタ」や「カワト」だったとしたら。かつて「カバタ文化」を守ろうと議会で提案したが、理解されなかった。女性を酷使するシンボルと批判もされた。しかし、何人もの方が、夏涼しく冬暖かいカバタは、「お嫁に来て一番嬉しかった場所やで」と励ましてくださった。<sup>49)</sup>

地元住民によると、海東氏は新旭町長の時から川端に関心を寄せ、「ないものねだりではなく、あるものさがし」をしようと言いつつ、郷土の魅力や宝物を見つけ、磨き、地域の元気を作り出す活動に力を入れてきたという。

次に、嘉田氏の影響を「世水フォーラム」における関わり方、とりわけ針江地区に海外の子どもたちが体験・宿泊をする契機となった「世界子ども水フォーラム」から明らかにする。平成 15 (2003) 年 3 月 17 日・18 日に世界水フォーラム<sup>50)</sup>の一環として、世界子ども水フォーラムが開かれ、海外 11 カ国から 37 人の子供たちが針江に 1 泊 2 日間滞在した。世界子供水フォーラムの開催には、前滋賀県知事の嘉田氏の働きかけがあった。彼女は、1990 年代中頃から、自らアフリカ等途上国の水問題の現場を見て、生活のための水が、子供や女性によって入手されることを知り、生活の現場における子供と女性の役割の重さを感じたという。しかし、2000 年にオランダ・ハーグで開催された第 2 回世界水フォーラムで子供たちの声がほとんど取り上げられていなかったため、平成 15 (2003) 年の日本での世界水フォーラムでは「世界子ども水フォーラム」を提案・企画・運営にかかわった<sup>51)</sup>。嘉田氏が代表を務める「水と文化研究会」と新旭町が、実質的な受け皿となり、その実行にかかわることとなった<sup>52)</sup>。

針江地区に訪れたアフリカの子供たちは、湧水がこんこんと自然と出てくる光景を見て、針江地区の水の豊かさに驚き、針江は、自然に恵まれた素晴らしい場所であると語ったという。例えば、アフリカのアンゴラから参加した女性のジェルミナ・サンチェスさん (16 歳) は、「水がきれいで、魚がたくさんいて気に入った。アンゴラでは汚い水をそのまま飲んでいるので、自分の国にこんなきれいな場所があったら、パラダイスです。」と興奮気味に述べた<sup>53)</sup>。チャドから来たセラフィン君 (17 歳) は、「美しい水路を保つには汚れものを流さないという地域のルールが守られているに違いない。水路に水神さんが置かれているのは、水への信仰があつからだ。」と述べ、マラウイから来たジョン君 (17 歳) は、「マラウイでは、人間のし尿は忌み嫌うべきもので、トイレもつくらないで野原にし尿を放置し、それが水を汚して伝染病の原因ともなっています。日本のようにし尿を肥料として利用する生活のしかたをマラウイでも広めたい。」と語った<sup>54)</sup>。世界中から集まった子どもたちの声を聞いた地元の子供たちは、世界の厳しい水をめぐる現状を知るとともに、針江地区では当たり前のように出てくる湧水が、特別なものであることに気づかされたという。



写真1 子どもたちが世界から、交わり<sup>57)</sup>

出典：滋賀県新旭町『針江水ごよみ』を筆者撮影

同年、針江地区は、日本全国エコツーリズム大会の会場となり、映像詩『里山Ⅱ一命めぐる水辺』が放映された後の平成16(2004)年8月20日には、地雷サミット・フィールドワークも受け入れた。アフリカの小学生30名が針江地区を訪れた。これは平成15(2003)年2月8日、日本が保有していた対人地雷の最終破棄が完了した日に、高島市(旧新旭町)で、「地雷をなくそう！全国こどもサミット」が開催されたことと関連する<sup>56)</sup>。

最後に、メディアによる「里山針江」の表象に伴う地域内の取り組みと外部の評価を整理する。平成16(2004)年にNHK映像詩『里山Ⅱ一命めぐる水辺』が放映されてから、地域外部から多くの人々が針江地区を訪れるようになり、地元は対応を迫られるようになった。行政の担当者と地元住民の有志が参加した会議で、現在の案内のモデルとなるコースが行政の担当者から提案されたことを受け、「針江生水の郷委員会」を立ち上げ、住民自ら案内をするという取り組みを行なった。「針江生水の郷委員会」の中心メンバーは、地元の50歳以上の住民で構成される「壮友会」と「老人会」であった<sup>57)</sup>。見学者を案内する実践を通して、針江生水の郷委員会のメンバーは、川端を含む、彼らの生活文化を見直す契機を得る。来訪者の数も年々増加し、2004年に約1,000人だったが、2006年には2,721人、2007年には5,339人、2008年には7,440人、2009年には7,639人が針江生水の郷委員会を通して案内を受けた<sup>58)</sup>。「針江生水の郷委員会」は、案内活動にとどまらず、自然環境保全活動を中心とするまちづくり活動へとその実践の幅を広げ、農林水産省主催の「美の里づくり」の審査会特別賞(2005年)、「豊かなむらづくり」農林水産大臣賞(2006年)、環境省・日本エコツーリズム協会主催のエコツーリズム大賞の特別賞(2007年)、優秀賞(2012年)、大賞(2014年)を次々と受賞した。

針江地区は、海外のメディアからも注目されるようになる。最初に韓国で『里山Ⅱ一命めぐる水辺』の放映を通じて針江を紹介したのは、民営のMBC放送局であった。MBCは韓国国内の反響が大きかったため、その後同ドキュメンタリーを再放映した。平成17(2005)年12月には、韓国国営放送局KBSが取材に針江地区を訪れ、それ以降毎年取材を続けている<sup>59)</sup>。また、台湾でも『里山Ⅱ一命めぐる水辺』が放映され、台湾からも個人旅行で針江地区を訪れる人も多い。平成22(2010)年

には、中国国営テレビの取材が、国土交通省の協力のもと、「水と環境」というテーマで実施された<sup>60)</sup>。

平成 19 (2007) 年 4 月 17 日には、オーストラリアから 23 名が「究極の日本体験ツアー」で来訪、同年 7 月 28 日には、韓国の子供たち 60 名が交流体験で針江地区を訪れた。それに加え、平成 22 (2010) 年 5 月には、21 世紀東アジア青少年交流事業として外務省より招待された、タイの高校生 24 名が川端を見学し、針江大川の藻刈り体験もした<sup>61)</sup>。

針江地区は、日本国内の都市民だけに「うるおい」「やすらぎ」を与える「里山」ではない。同地区は、国土交通省や外務省によって、「日本の原風景」として国外にも表象される。「里山針江」は、世界に向けられるナショナルな思惑が垣間見られる場でもある。実際、針江地区は、平成 22 (2010) 年に霜降地区とともに重要文化的景観（「針江・霜降の水辺景観」<sup>62)</sup>）、その 5 年後には日本遺産（「琵琶湖とその水辺景観」）に選定され、「お墨付き」の里山となった。

## V. おわりに

本稿では、否定的なまなざしを受けた伝統的水資源利用がどのような過程を経て、「里山」表象の中核を成すようになったかを、滋賀県高島市新旭町針江地区を事例に取り上げ考察した。まずⅡ章では、里山という用語が人里と離れた奥深い山の対義語から農山村全体を指すようになったことを記述した。次に、1990 年代後半から急速に里山の用語が使用される頻度が高まったことを確認し、その背景に文化的景観や農政の変化、環境政策への転換の流れ、観光まちづくりの政策化が考えられ、「里山」が理想的な農山村を描く政府の思惑に合致する概念として捉えなおされたことも指摘した。なお、メディア、研究領域で「里山」「SATOYAMA」の用語の使用頻度が急速に増加する時期（1998 年、2004 年、2009 年）は、上述の背景に連動し、「里山シリーズ」の放映年度（1999 年、2004 年、2008 年）とも関連していることを指摘した。Ⅲ章では、『里山Ⅱ—命めぐる水辺』の撮影地であり、本稿で事例として取り上げた針江地区の概要と針江地区を対象にした研究を整理した。Ⅳ章では、針江が「里山」として発見及び表象されるまでの過程を 4 つの時代に区分し、その詳細をまとめた。

1980 年以前には、内湖の中島の泥や水草、鯉や鮒の漁、川藻を利用しながら自然環境への手入れをする針江住民の姿が見られた。1980 年代には、上水道敷設工事が行われ、上水が普及される一方、鳥越皓之や嘉田由紀子らの研究者によって、琵琶湖周辺地域を生活の場とする人々の環境へのかかわり方を評価する「生活環境主義」が提唱された。1990 年代には、地域住民と研究者による共同研究の動きが顕著となる一方、水利用や川端に関しては否定的な捉え方が見られ、行政側やアドバイザーとして新旭町に招かれた専門家からも観光資源として認識されていなかった。2000 年以降、針江地区は「里山」として地域内外から表象されるようになる。2003 年に開かれた世界水フォーラムの世界子ども水フォーラムが前滋賀県知事の嘉田氏の働きかけもあり、新旭町で開かれ、針江地区にも海外 11 か国から訪れた子供たちが滞在した。2004 年には、地雷サミット・フィールドワークを受け入れ、住民自らも針江地区の水環境を見直すこととなった。また同年には、他方では針江地区を舞台にしたドキュメンタリー『里山Ⅱ—命めぐる水辺』が全国放映された。その後、同作品は、国外からも高い評価を受け、国内外から川端をはじめとする針江地区における水資源利用及び環境へのかかわり方が注目された。地域住民自らも「針江生水の郷委員会」を組織し、外部から針江地区

に訪れる見学者を受け入れるが、自然環境保全活動やまちづくりへと実践の幅を広げ、エコツーリズム大賞の特別賞、優秀賞、大賞を次々と受賞する。針江地区は、海外メディアからも注目を集め、「日本の原風景」として表象されるようになる。実際、同地区は重要文化的景観、日本遺産に選定され、日本を代表する「里山」として位置付けられる。

本稿では、針江地区が「里山」として発見されるプロセスを、研究者、行政、地域住民、メディアのかかわりから明らかにした。そのなかでも1970年代後半から琵琶湖周辺地域の調査を行い、1980年代に生活環境主義を提唱し、その後半からは「ホタルダス」「水環境カルテ」「ビワコダス」「水の学会」の実践を担ってきた「水と文化研究会」の代表を務める嘉田由紀子氏の影響は特筆すべきであろう。嘉田氏は、2000年代にも、世界水フォーラム、とりわけ世界子どもフォーラムに深くかかわり、針江を世界に表象する重要な役割を果たす。さらに本稿では詳細までは記述できなかったが、2期を務めた滋賀県知事としての影響も看過できない。彼女は「里山」という用語の変遷が見られ、理想的な農山村が「里山」という用語とともに描かれる前から守るべき水利用の文化を有する地域として、針江を発見し表象し続けたのである。

ただし、生活環境主義から示唆される嘉田氏の研究者としての立場、そして「もったいない」という標語で象徴される地方行政の首長としての同氏の主張や取り組みにおいて、針江地区が特別な意味を持っていたことも考慮すべきである。さらに、『里山Ⅱ一命めぐる水辺』のプロデューサーである今森光彦氏も映像を通して自らが考える理想的な地域像を投影していることにも注意を払う必要がある。なお「里山針江」という表象は、思想的変化、政府の思惑等が絡み合うなか、嘉田氏や今森氏を含む多様な主体のかかわりを通して可能になったことも再度確認しておきたい。

本稿の課題は、農山村の文脈再編について十分に議論しておらず、地域の文化や資源の活用において生じる課題にも触れていない点であると考えられる。今後、これらの課題を意識しながら、地方社会における里山の表象と関連する多様な実践に焦点を当て考察を深める必要があるだろう。

## 注

- 1) 本稿は筆者の博士学位論文「観光まちづくり現場の民族誌的考察の試み—大分県由布院と滋賀県針江の事例を通して—」の一部を加筆・修正したものである。
- 2) 第57回イタリア賞のテレビドキュメンタリー文化・一般番組部門/イタリア賞(最優秀賞)、第38回アメリカ国際フィルム・ビデオ祭の環境問題部門教育部門/クリエイティブエクセレンス賞、第11回上海テレビ祭の自然ドキュメンタリー部門/マグノリア賞、第1回ワイルドサウス国際映画祭/グランプリ(Best of Festival)、第28回国際野生生物フィルムフェスティバル/グランプリ(Best of Festival)・最優秀賞優秀脚本賞・優秀撮影賞・優秀音楽賞、第48回ニューヨーク・フェスティバル2005のテレビ番組自然・環境部門/金賞(最優秀賞)(映画『里山』公式ホームページ、<http://satoyama.gaga.ne.jp/>、2012年12月14日閲覧)。
- 3) 針江地区では、湧き水を生まれる水という捉え方で生水と書いて「しょうず」と読む。
- 4) 嘉田由紀子「水利用の変化と水のイメージ—湖岸域の水利用調査より—」(鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史—琵琶湖報告書』、御茶の水書房、1985、所収)、205-240頁。
- 5) 新村出編『広辞苑 第5版』、1998、岩波書店。
- 6) ①農業や農村の生活との関連で利用される薪炭林など、人為的な影響のもとで形成され管理される森林、②平地農村から農山村にある森林、③二次林の主要な成立基盤である丘陵地に視点をしぼったもの、④雑木林やため池、田圃、集落などを含んだ環境のセット(深町加津枝・佐久間大輔「里山研究の系譜—人と自然の接点を扱う計画論を模索する—」、ランドスケープ研究61(4)、1998、276-280頁)。
- 7) 堂下恵「里山の資源化—京都府美山町の観光実践より—」(山下晋司編『資源化する文化』、弘文堂、2007、

- 所収)、281頁。
- 8) 堂下恵『里山観光の資源人類学—京都府美山町の地域振興』、2007、新曜社、33-80頁。
- 9) 前掲8)
- 10) 「里山」「さとやま」が毎日新聞記事の見出しに使われる頻度を算出した。毎日 News パック、<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WMNP/main.jsp?ssid=20161016164321594gsh-ap03>、2016年10月16日閲覧。
- 11) 「satoyama」で検索した結果。ProQuest、<http://search.proquest.com/results/279E469FEBE146BEPQ/1?accountid=130155>、2016年10月17日閲覧。
- 12) 菊地暁「コスメティック・アグリカルチュラリズム—石川県輪島市「白米の千枚田」の場合—」(岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』、吉川弘文館、2007、所収)、86-104頁。
- 13) 新旭町『新旭町誌』、1985、9-10頁。
- 14) 新旭町企画広報課『人と自然が錦織りなすまち—第4次新旭町総合計画』、2001、15頁。
- 15) 高島市役所の公開データ(2011年)。
- 16) 小坂育子『台所を川は流れる—地下水脈の上立つ針江集落』、新評論、2010、83頁。
- 17) 高島市新旭地域のヨシ群落および針江大川流域の文化的景観保存活用委員会編『「高島市針江・霜降の水辺景観」保存活用事業報告書』、2010。
- 18) 2004年以前に行われた研究としては、針江弥生式遺跡や針江浜遺跡に関する研究が挙げられる。  
 ①横山卓雄他「琵琶湖北部針江浜遺跡の湖底粘土の堆積環境とそれに含まれる火山ガラスの堆積年代」、京都大学教養部地学報告23、1988、9-17頁。  
 ②横田洋三「針江浜遺跡検出の地震の痕跡」、古代学研究143、1998、45-48頁。
- 19) 内木摩湖・石川慎治・濱崎一志「滋賀県高島市針江地区におけるカバタについて」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2008、615-616頁。
- 20) 村上慶太・石川慎治・濱崎一志「滋賀県高島市針江地区におけるモノケについて」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2008、613-614頁。
- 21) 北澤大祐「滋賀県高島市新旭町針江地区の水辺景観における景観構成要素の成り立ち」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2009、469-470頁。
- 22) 田中周平・藤井滋穂・西川淳ほか「琵琶湖沿岸ヨシ群落の植物種構成による再生評価手法の検討」、環境衛生工学研究18(4)、2004、11-20頁。
- 23) 牧野厚史「ヨシ帯保全における自然と人間との適度な関係」、滋賀大学環境総合研究センター研究年報5(1)、2008、1-12頁。
- 24) 西尾崇志・藤田大輔「水路を利用した集落の観光化に関する考察」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2007、413-414頁。
- 25) 杵掛博光・敷田麻実「エコツーリズム推進における適地性と発展プロセスの比較研究」、日本観光研究会全国大会学術論文集23、2008、201-204頁。
- 26) ①野田岳仁「観光まちづくりのもたらす地域葛藤—「観光地ではない」と主張する滋賀県高島市針江集落の実践から—」、村落社会研究ジャーナル20(1)、2013、11-22頁。  
 ②野田岳仁「コミュニティビジネスにおける非経済的活動の意味—滋賀県高島市針江集落における水資源を利用した観光実践から—」、環境社会学20、2014、117-132頁。
- 27) 前掲17)
- 28) 水と文化研究会の活動の一環としての水環境カルテの調査結果で針江地区の田中ヨノ氏・美濃部フミ氏は、30～40年前は「調査が1995年に行われており、上記の昭和20年代を指す」、川は「美しかったので、掃除しない」と語っている(水と文化研究会ホームページ、<http://koayu.eri.co.jp/Mizubun/>、2012年9月8日閲覧)。
- 29) 滋賀県内で最初に下水道を敷設したのが大津市であるが、それは昭和44(1969)年のことであった。それに比べると、上水道が、大津市に下水道がつくられてから10年がすぎた年の昭和54(1979)年に針江・太田地区に工事が始められたのは県内での水道化に大きな差があったことを物語る。その要因の一つとして鳥越は、建設省と農水省の“なわばり”に巡る縦割り行政を象徴するような対立を挙げている(鳥越皓之「生活排水のゆくえ—湖岸部の下水道問題—」(鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史—琵琶湖報

- 告書』、御茶の水書房、1985、所収)、279-320頁)。
- 30) 前掲 17)、133 頁。
  - 31) 全国的には、主に昭和 30 年代に簡易水道の普及が見られる。
  - 32) 嘉田由紀子氏は昭和 48 (1973) 年に京都大学農学部を卒業し、同じ年に京都大学大学院農学研究科に入学し、同年にアメリカ・ウィスコンシン大学大学院に留学する。昭和 54 (1979) 年から家族とともに大津に居住する。昭和 56 (1981) 年に博士課程後期課程を修了し、滋賀県庁に入庁する。翌年には琵琶湖研究所研究員になり、昭和 62 (1987) 年には、「琵琶湖の水問題をめぐる生活環境史的研究」で京都大学農学博士号を取得する。平成 9 (1997) 年に琵琶湖博物館総括学芸員になり、平成 12 (2000) 年に京都精華大学人文学部教授、琵琶湖博物館研究顧問の役を兼ねる。その後、平成 18 (2006) 年 7 月には滋賀県知事に当選し、2 期目まで務めた (滋賀県ホームページ参照、<http://www.pref.shiga.jp/chiji/profile.html>、2012 年 12 月 5 日閲覧)。
  - 33) 嘉田由紀子『生活環境主義でいこう—琵琶湖に恋した知事』、岩波書店、2008、84 頁。
  - 34) 桜井厚「川と水道—水と社会の変動—」(鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史—琵琶湖報告書』、御茶の水書房、1985、所収)、163-204 頁。
  - 35) 鳥越皓之『環境社会学—生活者の立場から考える』、東京大学出版会、2008、66 頁。
  - 36) 鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史—琵琶湖報告書』、御茶の水書房、1985、iii - iv。
  - 37) 新旭町『風車と花菖蒲のまち新旭—新旭町景観形成基本方針』、1988、90 頁。
  - 38) 仲上は、琵琶湖総合開発事業の第 2 期 (昭和 57 (1982) 年度～平成 3 (1991) 年度) において、滋賀県地域環境管理計画、世界湖沼環境会議のような取り組みから地域住民の主体性の発揮する場が設けられたと記述している (仲上健一「琵琶湖の環境価値と環境保存政策」(立命館大学人文科学研究地域研究室編『琵琶湖地域の総合的研究』、文理閣、1994、所収)、21-42 頁)。ただし本稿では、1990 年代を地域住民と研究者による共同研究が盛んに展開された時期として捉える。
  - 39) 琵琶湖博物館インターネット資料館内の水と文化研究会、<http://koayu.eri.co.jp/Mizubun/> (2011 年 9 月 13 日閲覧)。
  - 40) その詳細は、水と文化研究会編『みんなでホテルダス—琵琶湖地域ホテルと身近な水環境調査』、新曜社、2000 を参照されたい。
  - 41) 新旭町企画広報課『新旭町 50 年の歩み』、2004、27 頁。
  - 42) 前掲 33)、86 頁。
  - 43) 今森光彦『里山を歩こう』岩波書店、2008、57 頁。
  - 44) 前掲 43)、52-29 頁。
  - 45) 個性ある湖西の新旭町は「グレープ・ビレッジ」になるか (伊達美徳)、まちもり通信、<http://homepage2.nifty.com/datey/> (2012 年 12 月 12 日閲覧)。
  - 46) 新旭町企画広報課編集『第 4 次新旭町総合計画』、2001、新旭町企画広報課。
  - 47) 前掲 46)、104 頁。
  - 48) 前掲 46)、104 頁。
  - 49) 前掲 16)、190-191 頁。
  - 50) 世界水会議 (World Water Council: WWC) によって運営されている世界の水問題を扱う国際会議である。1997 年第 1 回世界水フォーラムがモロッコのマラケシュにて開催された以降、3 年ごとに開かれ、2003 年には第 3 回世界水フォーラムが京都で開催された。第 4 回目の 2006 年には日本政府の提唱によってアジア・太平洋水フォーラムが設立され、「第一回アジア太平洋水サミット」が、2007 年 12 月に大分県別府市で開かれた。前掲 8) を参照。
  - 51) 前掲 33)、178 頁。
  - 52) 中日新聞、朝刊 2003 年 3 月 18 日、22 ページ参考、見出し:「2003 世界水フォーラム きれいな『わき水』に驚き 海外 11 カ国の子どもたち 新旭町を訪れ交流」
  - 53) 前掲 52)
  - 54) 前掲 33)、180 頁。
  - 55) カレンダーの中での説明は次の通りである。2003 年 3 月 17 日と 18 日、世界子供水フォーラムの仲間が、

針江にやってきました。川端を見学して、針江の水の豊かさにびっくり。「こんなにきれいな水を流してしまってもったいない」と言うアフリカの子どもも「この水が琵琶湖に注いで、京都の人たちが飲んでるんですよ」と教えると、水の流れの大切さをわかってくれました。案内をしてくれた針江の皆さんも、当たり前前に思っていたことが、特別なんだと気づかされた経験でした。

56) 2000年1月17日に開かれた「対人地雷廃棄処理のイベント」には当時の小淵総理が来町している (<http://www.aarjapan.gr.jp/lib/act/act0410-3summit.html>、2012年6月6日検索)。

57) 前掲26) ②

58) 韓準祐「針江地区の観光形態の潜在的機能と地域アイデンティティ」、日本観光研究学会全国大会論文集25、2010、17-20頁。

59) 例えば、韓国国営放送、KBSスペシャルの文化の疾走(4)トレンド読み—エコツアー五感を呼び覚ませ(2006年4月30日放映)では、針江の事例はその他の世界中のエコツアーの事例とともに紹介されている。

60) 針江生水の郷委員会『川端通信』、2010年6月19日、第7号参照。

61) 前掲60) 参照。実際、韓国、台湾からも個人で針江地区に訪れる人が多いという。韓国の団体旅行に関しても、関西圏のコースに針江見学を入れるケースが増えてきている。実際、調査中も韓国からの団体客が訪れる予定であったものが、移動時間が予想よりかかり関西空港での帰り便に間に合わなくなる可能性があったため、当日取り消しの連絡が入ったこともあった。また、2011年夏、調査の際、一緒に案内を受けた人のなかでは、欧米人を対象に個人的にガイドをしている人もいた。

62) 平成20(2008)年に「高島市海津・西浜・知内の水辺」が重要文化的景観として選定されており、当時一自治体の複数選定は初めてのことだった。平成27(2015)年には、「大溝の水辺」が重要文化的景観として選定され、市内では、全国最多の3か所目の選定となった。

(本学文学部特任助教)

## Discovered *Satoyama*: Harie

by

Junwoo Han

This article aims to analyze the discovery process of *Satoyama* Harie by focusing on the various actors including researchers, municipalities, media, and residents. Before 1980, the system of pruning and maintenance using local resources continued. Then in the 1980s, municipalities carried out a water and sewerage project, and a research group consisting of sociologists and anthropologists advocated Life Environmentalism. Research projects cooperation with local residents followed in the 1990s. After 2000, the Harie district portrayed as “*Satoyama*” and “*Ultimate Japan*”, and Kada, future governor of Shiga prefecture, designed the Children’s Water Forum a sub-project of the 2003 World Water Forum held in Shinasahi town including the Harie district. After airing of the NHK documentary, “*Satoyama: Japan’s Secret Watergarden*” focusing on the coexistence of humans and nature in the Harie district in 2004, lots of people rushed to the Harie district from other areas of Japan and also from abroad. Harie district called for volunteers and created “the Committee of Harie Shozu Village” to guide visitors in May 2004. Their practices have not been limited to guide, but enlarged to include nature preservation activities. The committee has received many awards, including Japan’s Ecotourism Awards, and Harie district was as a Cultural Landscape in 2010 and Japan Heritage site in 2015.